当たり前に縛られなくていい

市原市立五井中学校　三年　浦井　純菜

「なんかかわいそうだね・・・」

「ちょっと、みんなと違うよね」

新しい学校生活の期待と不安に胸を弾ませていた中学一年生の春。級友から言われた言葉を、私は鮮明に覚えています。

私は小学三年生のころ勉強のことで悩み、不登校になってしまったことがきっかけで、小学生のときから特別支援学級で過ごしてきました。そして、中学校でもその道を選びました。

小学校の頃から一緒に過ごしてきた友人たちはこれまで通り接してくれました。また、中学校へ入学してから仲良くなった友人に、特別支援学級に在籍していることを伝えても、何も変わらず親しくしてくれる人がほとんどでした。

しかし、ごく一部の人にはあまりよく思われなかったのか、次第に距離がひらいていきました。そして、人によっては「可哀想」とか「変だよね」など言われることが数多くありました。でも、私はそのように言われるたびに、胸がもやもやするような気持ちになりました。「どうしてみんな、そんなふうに思うのだろうか。」と。

確かに特別支援学級にいる生徒は、身体や心に何かしらの「違い」を抱えています。しかし、それは決して「可哀想」とか「変だ」と考えるべきではないと思います。通常学級でも、特別支援学級でも、さまざまな生徒がいます。教室で静かな人と明るい人も「違い」ますし、周りを気にせずに自分らしさを出せる人もいれば、周りの目を気にしてしまう人も「違い」があると思います。一人ひとりに「違い」があるのです。だからこそ、私はものの見方や考え方、価値観などで、『当たり前』とは人それぞれ違うこと、『当たり前』には、決められた正解はな

いということを知ってほしいのです。

そうすれば、「周りの人と違うことは、可哀想なことではない」ということに気づくとともに、「違い」に気づくことで、見つかる幸せもあると思います。

人は誰もが、幸せに過ごしたいと願っています。私にとっての幸せな時間は、特別支援学級の仲間と過ごす何気ないひとときです。

幸せは、人それぞれです。自分自身が、心から、笑うことができる場所であれば、それはとても幸せなことだと思うのです。

行動や話し方が少し違うというだけで、陰口や悪口を言われることは、本当に心が痛みます。しかし、それはきっと私たちの身の周りには、「当たり前」に縛られてしまっている人が、たくさんいるからではないでしょうか。周りの人と自分を比較して優越感や劣等感をもったり、周りの人と同じようにしなければならないと考えたりするのではなく、自分の気持ちや自分の考えを大事に、自分の幸せを大切にすること。

そして、素直な気持ちで偏見をもたずに人と向き合うことが、私は「当たり前」に縛られずに生活するための第一歩だと思っています。

障害を持つ人々への偏見や差別が一日でも早くなくなることはもちろん、お互いの「違い」を認め合い、尊重できる世界になることを心から願います。

皆さんにとっての「当たり前」とは何ですか？

いいえ、そもそも「当たり前」にしばられなくてもいいのです。